Un jour アンジュール

青森市男女共同参画情報紙

―性別・世代・時代を超えて―

アンジュールはフランス語で「ある日」という意味。一人ひとりの「ある日」を紡いでいきたいという願いを込めた情報紙です。

2024.9
NO.65

今こそ考えよう！防災について

＋ 多様な視点から

2024年1月1日、能登半島を大きな地震が襲いました。
多くのかたが避難生活を送るなかで、いろいろな課題が浮き彫りになりました。
災害はいつ・どこで起こるのかわかりません。
防災は平時からの備えが重要です。
今こそ、改めて防災について考えてみませんか？

特集インタビュー

一般社団法人男女共同参画地域みらいねっと代表理事

小山内　世喜子　さん

1995年第4回世界女性会議 NGOフォーラムに参加。以後、男女共同参画社会づくりに取り組む。2007年から青森県男女共同参画センターの指定管理者として運営、副館長、館長を務めた後、2017年から現職。

東日本大震災以降「防災と男女共同参画」をテーマに防災人材育成研修やジェンダー視点を取り入れた防災教育・避難所運営訓練を、延べ30,000人以上を対象に全国で実施。

2024年1月の能登半島地震以降、8回にわたって被災地穴水町などの被災地支援に入り、避難所の開設、運営にも携わる。

第5回ジャパン SDGs アワードにて「特別賞」受賞。国（内閣府、文部科学省）の有識者会議委員や山梨県防災会議地震部会委員も務める。青森市在住、令和5年度青森市表彰受賞。

KAGAYAKI BITO 輝き人

青森市南部地域第8区連合町会 自主防災会

会長　相馬　多一郎 さん

NPO法人青森県防災士会理事。青年海外協力隊及びJICA職員として、11年間南米地域に赴任した。消防団、防犯指導隊、保護司、民生委員、福祉オンブズマンのほか、NPO法人あおもり男女共同参画をすすめる会、四季の会（ボランティアグループ）に加入するなど、多くの社会活動に取り組んでいる。

地域防災へのきっかけは海外勤務の経験

青年海外協力隊としての活動後、JICA職員として、青年海外協力隊の危機管理や安全対策を担当しました。防災という分野でなら、これまでの経験を地元に還元できると思い、帰国後は消防団に入りました。その後、防災士という資格があることを知ります。

防災士は阪神・淡路大震災を教訓としてできた資格です。震災当時は、日本にいなかったのですが、帰国後に震災で助けられた人の8割は公的支援ではなく、近所の人や家族、通りかかった人に助けられたと知り、地域防災の重要性を認識しました。そんな時に、防災士の資格を紹介され、受験しました。

地元の自主防災組織への加入

防災士の資格を取得し、現在はNPO法人青森県防災士会（以下「県防災士会」と記載）の理事に就任していますが、理事として、自主防災組織を支援しなければならないと思い、地元の青森市南部地域第8区連合町会（※）自主防災会（以下「自主防災会」と記載）に加入しています。この自主防災会は、旧大野村を中心とした連合町会の自主防災組織で、年に1回程度の住民を対象とした防災訓練の実施や、防災士の勉強会の実施、地域の防災士の育成をしています。メンバー28人の平均年齢は60代後半で、うち半数は町会長、残りは防災士です。

（※）青森市南部地域第8区連合町会
大野、大野山下、大野前田、大野ニュータウン、金沢、西金沢、南金沢、片岡、東片岡、南片岡、南信用町、若宮、若木、安田、細越の15町会で構成されている連合町会

地域防災での男女共同参画

大人は、男性も女性も、“男性は力仕事・女性は炊き出し”といった役割分担が染み付いてしまっていると感じますので、考え方が柔軟な子どもの頃から、男女“協働”の意識を備える必要があると思います。

避難所運営の際に、女性が運営委員の中にいることで、いろいろなかたへの配慮の視点が変わってくるかと思います。男性も、避難所には配慮が必要な人がいるとはわかっていますが、「どのように対応したらよいのかわからない」「誰かがやるのだろう」と思っているような人が多い気がします。

県防災士会では多くの女性防災士が活躍していますが、自主防災会は全員男性のため、防災士を受験する女性を募ってはいますが、試験となると気が重いのか、なかなか立候補者が出てこないのが現状です。残念ながら、まだ女性防災士は誕生していませんが、今年受験する女性がいるので、「今年こそ！」と期待しています。

危機管理意識の大切さ

気候変動により、毎年様々な災害が世界各地で起きています。「青森市ではそんなに大きい災害がこない」と思っている人が多いですが、自分の住んでいるところにどんな危険性があり、どういう対策をとる必要があるのかを知ることが大事です。旅行や仕事、進学などで青森市を離れた時に災害に遭う可能性もあります。いつ・どんな災害に遭うのかわからないので、ニュースや報道に気を配ること、災害対策や心構えが必要だということを、これからも伝えていきたいです。

＜発行＞
青森市　市民部　人権男女共同参画課
〒030-0801　青森市新町 1-3-7
TEL 017(734)2296　FAX 017(734)5765

＜編集スタッフ＞
相馬 千佳子　石村 江美子
（青森市男女共同参画プラザ「カダール」）

※転載ご希望の場合はご連絡ください。

『Un Jour』へのご意見・ご感想をお待ちしております。

アンジュール VIEW 誰もが安心して働ける職場環境づくり

各種調査によると、国内の性的マイノリティのかたの割合は約３～10%といわれています。自分の周りや職場にいないのではなく、偏見や無理解を恐れて、周囲に当事者であると打ち明けられておらず、困りごとがあっても職場に相談できていない可能性があります。

誰もが安心して働ける職場環境づくりの参考として、青森県発行の企業向けパンフレットを活用してみてはいかがでしょうか。

～内容～
○性の多様なあり方に関する基礎知識
○職場で導入できる事例の紹介　など

↑性の多様なあり方に関するパンフレットのダウンロードはこちらから

特集

防災について

～誰ひとり取り残さないために～

インタビュー　小山内　世喜子さん

能登半島地震での被災地支援

発災2週間後からこれまでに計8回、能登半島地震の被災地支援に行ってきました。現地は地形や道路の関係、作業員の不足などにより、震災から半年経っても、倒壊した建物の多くが残されたままでした。その一方で、被災者一人ひとりにとっては、自身の復興、生活再建に向けていろんな変化のあった半年だったと思います。

※石川県ホームページから

被災地支援から見えてきたこと

被災地では、避難所づくりの支援をしました。避難所の生活環境が悪ければ、災害関連死がどんどん増えるので、命を守るために環境改善はとても大事です。避難所は被災者が運営していますが、生きることに精一杯で、環境改善までする余裕がありません。だからこそ、支援団体等の外部からの力を借りながら取り組むのが効果的です。

複数の避難所を支援しましたが、被災地では「炊き出しは女性・リーダーは男性」といった固定的性別役割分担意識が根強く残っており、避難生活の構図にそのまま表れていました。

災害の影響は男女で違う!?

災害は全員に同じように降りかかりますが、その後の災害による影響は一人ひとり、そして性別により異なります。性別による違いについては、大きく二つに分けられます。

①身体的構造による違い

○女性は用を足すのに時間がかかる（トイレの時間が長くかかる）、膀胱炎になりやすい

○女性は妊娠・授乳・生理がある　など

男女で身体の構造が違うため、性別ごとのケアが必要。そのためには、小さい時からの性教育により、異性の体の仕組みや大変なこと、困りごとを知る機会を設けることが重要です。

②ジェンダーの問題

○炊き出しなど男女一方に特定の仕事が偏る

○女性に対する性暴力の発生やDVの悪化

○非正規雇用が多い女性の方が解雇や雇止めに遭いやすく、経済的に困窮しやすい　など

ジェンダーの問題は災害時だから起きるのではなく、平時からの社会の課題が浮き彫りとなったものです。だからこそ、平時における課題解決が大切です。

女性が声をあげられる環境を

避難所の転居支援をした際、転居後の新たなルール決めや役割分担の進行を私がすることになりました。避難者全員での話し合いで、女性達が意見を多く出してくれたのです。後で考えると、私が女性だったから、また、前日の避難所づくりの支援により、信頼関係が構築されていたから、発言しやすかったのだろうと思います。まだまだ、固定的性別役割分担意識が強い地域では、女性が意見を言うことは生意気だと捉えられることがあり、躊躇する女性も多いのが現実です。

さらに、女性に限らず、災害時は多くの人が「みんな大変だから我慢しなければ」と思っており、声を出さないことがあります。だからこそ、一人ひとりに寄り添って声を出せる環境を作っていくことが大切です。

防災では女性の視点が必要とよく言われますが、必要なのは”生活者の視点“だと思っています。平時にご飯を作ったことがない人や、子どもや高齢者の世話をしたことがない人が、改善点や必要なものに気付くことは難しいです。

だからといって、得意な人がボランティアでやる方がよいということではなく、生活者の視点を持っている女性達が声をあげ、提案していくことが、避難生活の改善につながるのです。

女性参画の必要性

避難所での性暴力や性被害の防止のためには、被害者となることが多い女性や子どもから意見を聞くことが大事です。人によって感じ方が違うので、誰に基準を合わせるのかではなく、一人でも不安を感じる人がいたら避難所の生活環境を改善する必要があります。

また、生理を経験したことのない男性が、生理用ナプキンや女性の下着について知る由がありません。能登では私が女性だったから、「下着やサニタリーショーツが必要だと言えた」という30代の女性がいました。

ですから、避難所の運営委員会やそのリーダー、支援者にも、男性のみならず、女性をはじめ多様な人々が参画することが大切なのです。

防災で大事なこと

防災ではまず、命を守るための備えが大事なことは言うまでもありません。しかし、大規模災害が頻発している昨今、災害関連死を出さないための避難所の環境改善とともに、風通しのよいコミュニティづくりも必要です。避難者間の情報共有と併せて、誰もが発言できる環境をつくることが、助け合いにつながっていくと思います。

男女共同参画の視点を取り入れた防災・減災は一人ひとりの能力を活かし合い、尊重し合いながら取り組むことです。それが、誰ひとり取り残さない地域防災につながります。そのためには「男女共同参画の視点を取り入れた防災訓練」が大切です。

備えあれば患いなし!!

小山内さんに聞いた、取り組むべきこと・備えるべきもの

災害が起きてない今だからこそ、
自分や家族を守るためにぜひご用意を！

取り組みましょう！

災害が起きた時の家族それぞれの行動について、家族みんなで話し合いましょう！

- □どこの避難所で待ち合わせするのか【重要】
- □家族間で連絡が取れなくなった場合の対応
- □両親とも仕事に行かなければならない場合の子どもの預け先　など

POINT!! 災害時に、親は仕事、子どもは学校、祖父母はデイサービスなど、家族が別々の場所にいることは十分にあり得ます。また、被害を増やさないためにも、家族それぞれが安全な場所に逃げることを共有しましょう！

備えましょう！

生き延びるため、最低3日分の備蓄を用意しましょう！
最低限用意しておくべきものは以下のとおり

- □水(1日につき、成人1人当たり3ℓ)
- □食料(1日につき、成人1人当たり2,000kcal)
- □簡易トイレやトイレの凝固剤

POINT!! 能登半島地震では、支援物資が3日間届かない、発災2日目の食料配布がおにぎり1日1人1個のみの避難所もあったそうです。

非常持出袋は1人1つ用意！

自宅を離れて避難する時のために必要なものを、あらかじめリュックサックに入れておきましょう。

POINT!! 1人が大量のものを持って移動するのは大変です。また、薬など、必要なものは一人ひとり違います。
誰か1人に任せるのではなく、各自が用意しましょう。

青森市の防災情報

○スマートフォン向け防災アプリ「全国避難所ガイド」

現在地周辺の避難場所・避難所、ハザードマップの確認や、平時からの防災情報の確認ができるアプリです。

↑ダウンロードはこちらから

○青森市避難情報電話・FAXサービス NEW

8月1日からサービス開始！災害発生時における避難情報を電話・FAXでお知らせしています。携帯電話やスマートフォンをお持ちでないかたは、ぜひご活用ください。

青森市避難情報電話・FAXサービス　SEARCH

○青森市メールマガジン（防災情報）多言語配信 NEW

8月1日から多言語配信を開始！

青森市　メルマガ　SEARCH

このほか、市公式ホームページやSNSで防災情報を発信しています

備えない防災!?「フェーズフリー」とは？

フェーズフリー　“いつも＝日常”と“もしも＝非常時”と分けることなく、日常で使用しているモノやサービスを災害時に役立てよう！という考え方

例えば、濡れた紙でも書けるボールペン、目盛付きの紙コップなど、いつもの生活では便利、もしもの時には役に立つフェーズフリー品も販売されていますので、気になるかたは検索してみてください。

フェーズフリー

青森県防災ハンドブック「あおもりおまもり手帳」

日頃からの災害への備えや災害が起きたときの自分の身の守り方を1冊にまとめた防災ハンドブックです。

災害から身を守るためのおまもりとして、ぜひご確認ください！

←詳しくはこちらから

【お問い合わせ】
青森県防災危機管理課
☎ 017-734-9181